

死ぬほど洒落にならない怪異達とガチバトルしています

ばぶ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

SNSや通信技術が普及し今や世界中の知識に端末一つで触られるほど、世の中は一層便利となつた。

だがこの世界、甘い汁だけ吸えるほど優しくできている訳ではない。より目まぐるしく駆け巡る情報は大衆の深層心理をより深く繋ぎ——顕在化させた。

生きる都市伝説<sup>ア</sup><sub>フオーグロ</sub>達。

電子の海で『洒落怖』などと称されていた異形が次々と現実を侵食していく中、事態を重く見た政府はある組織を編成した。

これはそんな世界で政府の犬をやりながら怪異にボコボコにされたり反対にボコボコにする青年とヤマノケ系少女のお話。

目

次

#  
1

口裂け女と金属バット

#  
2

きさらぎ駅と紅茶

13 1

## #1 口裂け女と金属バット

怪異だなんて仰々しく言うものでもない、それは単なる法螺話に過ぎなかつた。

今や昔とは違い、電子の海には様々な恐怖が溢れている。異形の化物と出会つた、山奥で得体の知れない影を見た、悪夢の中には何かが潜んでいる。

普段人はそれらを一笑に付しているが、本当の所はどうだろうか？

押し入れの隙間に、ミシミシと鳴る廊下に、暗がりの中に居るはずもない何かを幻視した事はないだろうか。

人が望んだから神は生まれた。

大衆が『いる』と信じれば、確かにそれはそこに『在る』のだ。

「瀬尾さん、目標捕捉しました。俺の現在位置から30m前方つて所ですね」

『了解、それで？』

電信柱の陰に隠れるようにして前を覗き込む。夕焼けが逆光になつて詳しくは確認できないが、赤いスーツに男と見間違う程の長身が数分前に突如出現して以降、何処へ行くわけでもなくただそこに立つてゐるのを観測している。

慣れないスーツに居心地の悪さを感じながら、手持ち無沙汰に首から提げている『宮津 太陽』とだけ書かれた身分証を手で弄ぶ。見た目はダサいが中にはICチップやら何やらが埋め込まれていて、キヤツシユレス決済やら交通系ICカード代わりになる優れもの。しかもよほどやらかさない限り、大体経費で落としてくれる。お国の犬万歳つて感じ、この間生ハムの原木買った時は流石に後から自費で

払わされたけど。

他にもあんな事やそんな事が起きた時には識別票として使つてくれるらしいが気分は迷子札だ。そして今自分が就いている仕事が死<sup>死</sup>亡<sup>行</sup>方<sup>不</sup>明<sup>あん</sup>な事やそん<sup>あん</sup>な事、ザラにあるって事の証明でもある。

インカム越しに現在の状況と『何』を見ているかについて報告する。

「9割『口裂け女』ですね」

『中々の大物じゃない、面倒だなあ……オツケー、どうする？ 花乃ちゃん向かわせようか？』

「花乃さん？ 嫌だなあ、女の子に危ない真似させたら男が廃りますよ」

『最近の若者は格好良いねえ、まだ18歳とは思えないや。まあ何にせよあの子を女扱いしてもしようがないよ。化け物からね、あれは』  
「マスクミに聞かれたら叩かれますよ』

『そう言いながら前方の怪異との距離を測る。今ならまだ気付かれていない、一目散に逃げ出せば振り切れなくもないかも知れない。『言つておくけれど口裂け女程度の被害想定じやあれは許可できないから、うかうかしてると斃り殺されて終わっちゃうよ』

「分かりましたよ、早く花乃さん呼んで下さ、い……」

随分と離れていた筈の女がいつの間にか目の前に立っていた。でかい。遠目からでは分からなかつたが2mはある。手には物騒な包丁のような鋸びた刃物が握られている。大きなマスクのせいでの表情は読み取れないが、その瞳は人ならざる者だと示すように深く淀んでいた。

「私、キレイ？」

生睡を飲む。この場合、否定するとその瞬間に襲い掛かられる。肯定するとマスクを外して「これでも？」と真っ赤に裂けた口を見せ付けながら襲い掛かってくるらしい。

つまりどう転んでも終わりと言う訳だ。バカかよ。

「あー……とてもお綺麗です、よつと！」

マスクを外すその一瞬だけ発生した間隙を縫う様に走り出す。

定説によれば口裂け女は100mを3秒台で走るらしい、直線は不

利だと路地裏に飛び込む。薄暗くゴミや換気扇などで入り組んだ地形を有利に活かしながら走り抜く。

少しば離せたんじやないかと後ろをちらりと見ると。

「キレイって、言つたじやないイイイイ!!!」

「ああああああ!!?」

振り乱した手が服に触れそうになるほど近くにそれはいた。どうやら俺が全力で回した知恵を圧倒的ファイジカルで轢き潰されているらしい。スーツの裾を包丁で刻まれつつも紙一重で躲しながらただただ全力疾走した。

『宮津君、ポマードだよポマード』

のんびりとした声がインカムから流れてくる。こちとら忙しいんだよ宮津って誰だ、なんて呆けた事を考えながらひた走る。

「……ポマード!!?」

一拍遅れてそれが自分に対して向けられたアドバイスなのだと気付いた。

『ポマードって3回唱えると逃げていくらしいよ、口裂け女つて』

「それ本当ですね瀬尾さん!? 信じますからね!!」

路地裏から転がるように大通りへと抜けた。帰宅ラッシュから少しだけ外れているのか通行人は疎らだ。これくらいなら後処理はどうともなる、そう息を大きく吸い込む。

「ポマードポマードポマード!」

「……」

此方へ今にも飛びかかってきそうだった口裂け女が足を止めた。わなわなと身体をただ震わせている。

怪異に物理攻撃は効かない。大衆の恐怖によつて存在するそれらに銃弾が通る筈もないし、膂力だつて人間が敵う筈がない。ならどうやつてその脅威を収めるのか、答えは簡単だ。

その逸話での退治方法、それをなぞれば良い。口裂け女にはポマードを、幽霊には塩でもぶつけていれば良いという訳だ。

「アタシ、キレイイイイイ!!」

一瞬で空と地面がひっくり返る。骨が嫌な音を立てて軋む。叩き

付けられた肺から一気に空気が漏れて呼吸ができない。死ぬ。通行人の悲鳴が何故か遠く聞こえる。

「ボマードを嫌がるんじゃなかつたのか？　いや、もしかして。

『宮津君なんか凄い音したけど!?』

「げほ、瀬尾さんこいつ、派生、します！　時間かけ過ぎたんですよ畜生が……！」

馬乗りになつた口裂け女が俺の首を万力の如き力で締め上げながら、包丁を振り被る。走馬灯なんて上等な物はない。近所のラーメン屋のチャーシューワンコロ券を使い忘れてたなあとか、よく考えたら借りたビデオ1ヶ月くらい返してないなあとか、己の人生の浅さを悔い改めさせるような回想ばかりである。

もしこの場を生き残る事ができたら真人間になろう。こんな物騒な仕事から足を洗つてラーメン食べてビデオ返して……真人間ってなんだよと意識が遠のく。

「テン……」

遠くからぽつりと声が聞こえた。

「ソウ……」

馬乗りになつて怪異が訝しげに辺りを見回す。

「メツ！」

突如空中から何かが落ちてきた。

衝撃と共にゴギンと鈍い音が響く。一拍置いて口裂け女が後ろへ倒れた。ぱつくりと割れたその額からは赤黒い血がチョコレートマウンテンみたいに噴き出している。

10階以上はあるビルから金属バット片手に飛び降りてきたのはまだ大して自分と年齢の変わらない、あどけなさの残る少女だつた。腰まで伸びた黒髪を鬱陶しそうに振りながら俺の手を取つて起こす。「ハイレタハイレタハイレタハイレタ

「……瀬尾さん、花乃さん着いたんで多分もう大丈夫です」

『了解、10分後には処理班を到着させるから勝手に帰つておいで』

一息ついて状況を確認すると、異様な音を立てながら口裂け女が再

び立ち上がるうとしていた。だがその足取りはふらついている。ダメージは確かに通っているようだ。

「テンソウメツ?」

こてんと彼女が不思議そうに首を傾げると、ハイレタハイレタハイレタハイレタと何処からともなく響く囁き声が辺りを満たした。それと同時に目の前の少女の顔が人間離れした獣のように歪んでいく。玩具を見つけた子供のように。餌を前にした狼のように。

『彼女』が女を象る怪異に負ける事は決してない。山の怪は女性に取り憑く、つまりそれより確実に強い。そう大衆に認知されているからだ。

岡部 花乃。オカベ カノ 怪異第三号にして同種殺しに派生した怪異。

そこから先は語る程の事もない。骨のひしやげる音と共に金属バットが怪異の頭を挽き肉へ変えていく様子を精細に述べる趣味もない。

「どつちが化け物か分かつたもんじやないな」

口裂け女だった物を足蹴にしながら息を吐く彼女の小さな背中を眺めながら、ぽつりとそう呟いた。夕陽に照らされながら返り血を拭う姿が神話の一場面のように映る。先程までの鬼神のような大立ち回りとは打って変わつて、ただの少女にしか見えない。

「まあ、俺も含めてだよな」

どうにも手持ち無沙汰で首筋を搔きながら、不安そうにきょろきょろと辺りを見回す彼女に手を差し伸べる。こんな死と隣り合わせの仕事を続けているのは使命感とか、生きる為だとかそんな下らない事じやない。本当の所は死ねるものならいつでも死にたい。それで今日も怪異達に食らいついていくのは。

「帰りますよ、花乃さん」

秋風が身に沁みる。

俺は今、恋をしている。

SNSが普及し、世の中は一層豊かで便利となつた。ただこの世界はそんなに甘くない、利益を得れば当然それ相応のデメリットも付いて回る。俺達が必死に潰して回つて『生きる都市伝説達』、小難しく言えば大衆の深層心理の顕在化とやらだ。

始まりは何の変哲もない片田舎で起きた事件だつた。

精神に障害を患つた女による少年殺害事件。これ自体は特に注目する事もない人間による殺人だつた。だが電子の海はそれを放つておかなかつた。

犯人である女性が180cmを越える長身であつた事。そして犯人が『上』の人間の親族であり、報道規制がなされた事。被害者が少年であつた事。

愛すべき不謹慎な人間達はSNS上でまことしやかに囁いた。  
あれは八尺様がやつたんだ、と。

憶測は更なる想像を齎し、虚構が現実へと侵食していく。

怪異第一号により某県にあるS村が一晩にして壊滅した『八尺災害』は未だ記憶に新しい。事態を重く受け止めた政府は二つの対策を考えた。

発生を阻害する方法と駆除する方法だ。

けれどこの現代社会で世間に広く浸透した情報を規制し、処理するのは不可能だと彼らは結論付けた。

つまり駆除するしかない。そこで内閣府が臨時に設立したのが対怪異災害対策本部、通称対怪。俺達の就職先と言う訳だ。

オペレーターや事務員で構成された後方部隊。各地のSNSや密偵からいち早く怪異の発生を察知し、派生する前に人員を派遣して処理に当たるインテリ様。

自衛隊や警察から選り抜かれた実働部隊。怪異発生地点の封鎖や情報交通規制、対策が確立している怪異の対応に当たるエリート様。そして俺と花乃さんのような訳ありの『駆除者』。派生の結果、常人には対応しきれなくなつた怪異を撃退するのではなく殺す為に俺達は飼われている。

「しかしよく生きてたね、死んだかと思つてたよ」

「瀬尾さん、あれ派生しかけてたんですけど？」確認されて数日つて話じやなかつたんですか」

「めんごめん、そう言いながら顔の傷を消毒してくれる初老の男に文句を言う。頼りなさげに垂れ下がつた眉とよれよれとスースが哀愁を感じさせる。

そんな瀬尾と名乗るこの目の前の男性が俺の上司であり、ここの本部長だ。

こんなおっさんの双肩に日本の治安維持の一端が任されているのだと思うとくらくらしてくる。

「派生したつて言つてたけどどんな兆候見せてた？ 次に活かせるかもしれないから」

「弱点抹消でしたね、そつちにリソース割き過ぎて被害拡大や汚染には派生してなさそうでした」

「確認されてる分には4体目だつたからね、口裂け女。認知されてる分、力は強いけど対策も多いからそれが妥当か」

基本的に既存の退治方法をなぞれば怪異は消える、本来ならわざわざ対策本部を作るほどでもない。

ただ、人の妄想には際限が無い。それが『派生』だ。

人から人へ噂が伝わっていくにつれ、その細部は歪んでいく。それに似た現象だが嫌になるほどたちが悪い。

発生した怪異は生まれた直後はそのまま噂通りの被害を起こし、噂通りの方法で退治できる。

だが時間が経つにつれてより凶悪に成長していく。どうしてどいつもこいつもそうなるのか、一度疑問に思つて瀬尾さんに聞いてみた事がある。

「だつて噂話には尾鱗がついていくものだろう？」

確かに、と納得せざるを得なかつた。人は話を盛る生き物だ。まあそれは置いておいて派生には概ね3つのパターンがある。

1つ目は『弱点抹消』。文字通り怪異に備わる弱点を自ら消してゆくクソツタレだ。ポマードと唱えても口裂け女は逃げ出さなくなるし、塩をぶつけても幽霊は消えなくなる。

対策方法が広く認知されている怪異に多い派生だ。わざわざこつちに振り切つてくる奴は地力が高いから長期戦になりやすい。

2つ目は『被害拡大』。基本的に怪異は少人数にしか被害を及ぼさないが、こっち方面に派生すると最悪だ。成長過程で数十人をターゲットとするようになり、育ち切ると街一つ壊滅させる場合もある。怪異第一号『八尺災害』もこの派生だ。

3つ目は『汚染』。これも広義の意味では被害拡大に近いのかもしれないが、後処理がより面倒臭い。怪異は大体自分の発生した場所付近を縄張りとしてその周辺に留まる。そのお陰で被害が出た時に迅速に処理しに行けるが、たまに文字通り自分の縄張りを汚染するタイプの奴がいる。被害拡大とは違つてそこまで広範囲に影響を及ぼす事はないが、そこは奴らのテリトリーと化す。

瘴気まみれの異界とも呼べるような空間で怪異とともにやり合う事は厳しい。

他にも細々とした派生はあるが凡そその3つだ。なお複合型もある模様。嫌になつちやうね。

中には花乃さんみたいな例外もいるが、怪異は基本的に人に害を為す。どうして彼女が俺達に協力してくれるのか、誰も知らない。一つだけ知つていてる事があるのなら彼女が怪異第三号、ヤマノケとやらの被害者であり今もそれに憑かれているという事だけだ。つまり恐らく、彼女自身の自我は殆ど失われている。身体は俺と同じ10代後半だが、精神年齢では3~5歳程度だと予想されているらしい。なんだか急に自分が犯罪者のように思えてくる。

「テン、ソウ、メツ」

瀬尾さんと話し込んでいると独特のリズムと共にひょこひょこと花乃さんが歩いてきた。分類上は彼女も怪異とされているが、特例として対怪の施設内のみ自由な行動を許されているらしい。

きょろきょろと辺りを見回した後、俺の隣りに腰掛けてくる。

「好かれてるねえ、宮津君」

「モテる男は辛いですよ」

事実上俺と彼女はコンビを組んでいる。派生した怪異を単独で処

理できるのは花乃さんしかおらず、そしてテンソウメツとハイレタとしか喋らず意思疎通が困難な彼女が唯一懷いているのが俺だからだ。愛の力？両想い？そんなものであればどれほどよかつたか。

焼菓子をそもそもそと食んでいる彼女の口元を拭つていると、オペレーターの一人が緊迫した面持ちで走ってきて瀬尾さんに何か耳打ちする。

「……宮津君、悪いんだけど『殿堂入り』だ。頼めるかな？」

殿堂入り。

怪異と一つに括れど、その実態は様々だ。その話が流行った時期、拡散に使われた媒体、大衆からの認知度。それによつて危険度が大きく上下する。その中で最も恐ろしいのが『洒落怖』だ。某匿名電子掲示板でまことしやかに囁かれ続けてきた怪奇の温床。口裂け女も認知度は高く危険な怪異である事に変わりはないが、ネット発の怪談は拡散性でも派生のしやすさでも従来の口伝てや書籍で伝えられた物を大きく超える。

その中でも特に出来が良く著名な怪談のいくつかをネットでは『殿堂入り』と称していたらしい。八尺様、ヤマノケなどなど。

それに肖り半分皮肉半分、特に力を持つてゐる十数の怪異を俺達もうそう呼んでいるという訳だ。

「何号ですか？それに早めに処理できるならそうしたいですけど、そもそも場所が絞れない」と

「それについては心配いらないよ、第二号だ」

「二号つて言うと……きさらぎ駅ですか？なんで今頃……」

怪異第二号、きさらぎ駅。

八尺様の次にその存在を観測されると共にそれと並んで一般人への知名度を誇つた、まさしく殿堂入りの怪異。

だが大きくなり過ぎた名前は持ち主自身すら殺す事がある。

SNSが発達するにつれ、昔ネットの片隅で読んだきさらぎ駅に自分が大きくなり込んだ！と名乗り加工した画像をアップする者が続出した。その中には当然本物もあつたのかもしれないが、悪貨は良貨を駆逐する。人々が偽物に飽きると共にきさらぎ駅自体の信憑性も落ち

てゆくのは当然と言えただろう。

こうして対怪が整備される前に無関心な群衆の熱狂によつてきさらぎ駅は生み出され、殺された。

だからこうして今も疑問に思つてゐる、なんで今更現れた？ と。  
「確認したのはつい先程だけれど……余程上手く潜伏してたらしくね、偵察と連絡が取れなくなつてゐる」

「……派生済みかもつて事ですか？きさらぎ駅なんてデータ全然ないんですけど」

「まあ十中八九『汚染』だろうね」

「ですよね～～～」

きさらぎ駅はその場所 자체が怪異である性質を持つ、早い話がゴキブリホイホイのようなものだ。故に弱点なんか消す必要もないしげわざ自分から被害を拡大する必要もない。よつて考えられるなら繩張りからの外敵排除の為の強化、汚染だろう。

「それで花乃ちゃんはどうする？連れて行つてもいいけど」

「今回は女相手じやなさそうだし留守番しててもらいますよ。じゃあ行つてきますね、花乃さん」

置いて行かれるのだと分かつたのか、隣に座る彼女が少しむくれた。この胸の高鳴りは何なのだろうか。恋なんて高尚な物じやない、獣の傷の舐め合いかもしれない。

「多分中に喰われた偵察や民間人がいるだろうから生きてたら救助を、それと今回は使用許可下りてるよ。殿堂入り相手だから、そうは言つてもなるべく使わない方が賢明だと思ふけれど」

「了解了解」

本部を出る直前、画面と睨み合つてゐるオペレーター達から花乃さんに向かはれる物と同じ畏怖、嫌悪、信頼に満ちた視線を背にひしひしと感じた。嫌われ者は悲しい。

指定された駅に向かうと、外からでも分かるほどの異様な氣配が満ちていた。顔面蒼白の職員に案内され、手配されている電車に乗る。乗客は自分ただ一人。

先に状況を聞くと、一般人も合わせて数十人は行方不明になつてい  
るらしい。基本的に怪異は人に危害を加えると更にその凶悪さを増  
す。

単なる法螺話だったそれが、造物主に牙を剥く事によつてその存在  
をより確立させられるからだ。恐怖は恐怖を呼ぶ。

数十人と言えば相当手こずる、けれど不思議と怖くはなかつた。た  
だ一つ嫌な事があるとしたら花乃さんを独りぼっちにしてしまう事  
だ。だから死ねない。一定の間隔で揺れる車内で、灯りが不規則に瞬  
き始めるのを確認すると目を閉じる。

同じ怪異として、彼女を独りにはしない。俺を殺せるのが彼女だけ  
なら、きっと彼女を殺せるのも俺だけだ。

ネクタイを締め直す。息を吐く。ノイズ混じりのアナウンスがが  
ら空きの車内に反響する。

『次は……活造り……活造りです……』

「——は？」

怪異第二号、きさらぎ駅。  
怪異第十三号、巢くう宮津太陽。

電子の海で生まれた原初の異界で今、己の存在証明を懸けた怪異達  
の闘争が幕を開ける。

## #2 きさらぎ駅と紅茶

『次は……活造り……活造りです……』

「——は?」

きさらぎ駅。

日本で最も有名なインターネット発のオカルトの一つ。

ある日普段乗っていた電車がきさらぎ駅、いわゆる『異界』に繋がった……というものであり、そのバリエーションは多岐に渡る。そこで何かに出会つてしまつた者、無事に帰れた者、消息の分からぬ者。

外部との連絡もままならなくなつた状態で未知の異界へ連れ込まれるというだけで危険な怪異ではあるが、このアナウンスは明らかにきさらぎ駅のそれとは違う。

違和感を感じ辺りを見回す。内装が明らかに先ほどと違う。真新しかつた筈のシートもどこか古く毛羽立つていて……まるで電車自身が一昔前の車種に置き換わつたような。

「やられたな……」

一つ前の車両から啜り泣く声が聞こえ始めた。怪異は派生によってその様相を変える事はあるが、概ね原典に沿つて活動する。きさらぎ駅はあくまで駅に降り立つてからが本番だ。つまり車両内で既に何か異変が起こりつつあるこの状況は極めてイレギュラー。

耳を塞ぎたくなるような絶叫が響いたかと思うと、止んだ。すぐに排泄物と臓腑の混じつた鏽のような臭いが前方から漂つてくる。

『次は……抉り出し……抉り出しです……』

アナウンスと共に席を立つと後方車両へ一目散に走り出す。鉛のように重くなつた身体が、既に敵の汚染区域に足を踏み入れているのだと警鐘を鳴らす。

そもそも最初から辻褄が合わない点が多過ぎた、きさらぎ駅はバージョンに違いはあれど数十人という大人数を悪意を持つて取り込むという逸話は定着していない。

被害拡大に派生したからだろうと一人納得していたが、どうやらそ

れが間違いだつたようだ。

これはきさらぎ駅なんかじゃない。

『猿夢』かよ……！」

猿夢、きさらぎ駅と同じく駅や電車をモチーフとした怪談の一つだ。

夢の中で電車に乗つていると、流れるアナウンスに合わせて小人達に乗客が『活造り』や『抉り出し』によつて殺されていくというのが簡単なあらすじ。

きさらぎ駅よりも初出は古く大衆からの認知度も低いが、こちらには底知れない悪意がある。

耳を劈くように喧しく鳴り響くアナウンス、後方から迫り来る何か。

本来、猿夢の中では金縛りのように身動きが取れなくなるのが定説だ。だが今この空間の中では確かに走つて後方車両へ移れている。逃げ場などないと諦めるのは少々時期尚早だつたのかもしれない。どこかぶつけたのか、頭から垂れる血を汗と共に手で拭う。

「確かにお前は無敵かもな。夢の中つて繩張りじや怪異相手に抵抗できるような人間がいる筈がない。でもここは現実だ。走れば疲れし怪我をすれば血も出る」

車両ドアを開けて数多の小人達がなだれ込んでくる。血走つた目、各々の手には活造りやら抉り出しに使うのであろう物騒な得物が握られている。

「俺がお前の繩張りに入つてきたんじやない。お前があいつのテリトリーを土足で踏み荒らしてたのだけだ」

俺が確信を持つて言い放つと同時に、捩じ切るような金属音と共に電車が急ブレーキをかける。慣性の法則に従つて宙を舞い——まるでそう仕向けられたかのように都合良く開いたドアから外へ投げ出された。

突然の事にまともに受け身も取れず地面に転がつて3回転半、げほげほ咳込みながらようやく立ち上がる。下ろしたてのスースはあちこち裂けているし傷から血も滲んでる、痛い。

つまりここは夢じやない。奴の縄張りではない、かといつて現実世界でもない。

止まつた電車の扉に張り付くように小人達がケタケタと笑つている。爆音のアナウンスが嘲笑う。

『逃げるんですか？ どう頑張つても貴方はここで最後ですよ』

電車が動き出す。悪夢を乗せてトンネルの向こうへそれは消えていつたが、戻つてくるのは時間の問題だろう。痛む身体を引き摺りながらベンチに座ると改めて周囲を観察する。殆ど確認する必要もないだろうが、この仕事は情報が文字通り命綱だ。

文字化けした時刻表、人の気配のないホーム、そして錆び擦れてはいるがその案内板だけは読み取れる。

きさらぎ駅。

これはきさらぎ駅じゃない、猿夢だ。そう結論付けたのも早計だつたらしい。靴音を鳴らしながら誰かが自分の方へ近付いてくる。

チロリアン型の帽子を目深に被り、ダークネイビーを基調とした制服を身に纏つた女性。外見だけ見れば20代程だが、きっと当てにならない。

にこやかにそれは微笑む。

「ようこそいらっしゃいました。私が『きさらぎ駅』でござります」

「はは……」

笑うしかないだろ、こんなの。

怪異は基本的に己の意思を持たない。奴らに共通しているのは人々を戦慄させ、より大衆に自分達を認識させる事だ。それは生物が子孫を残そとする本能と何ら変わらない。

だが物事には例外が付き物だ。例えば俺葉くうものや花乃ヤマノケ憑きさんのような人間と共に生する事で初めて存在できる怪異。

もう一つは派生によつてその在り方 자체が変わつた怪異。これは有名所に有りがちだが、人々がそれに恐怖以外の側面を見出す事で怪

談ではない別の『何か』に変質する事がある。

そうは言つてもかなりのレアケースだ、俺だつて実物を見た事ないし。

「どうか駅なの人にじやないですか。そこん所もよく分からないんですけど」

「この身体ですか？ これはあくまで貴方達との交渉用のインター  
フェイスの様なものだとお考え下さい。顔立ちも好まれやすいよう  
整えてありますがお気に召しませんでしたか」

「残念、俺好きな子いるからそういう努力意味ないですよ」

交渉にインターフェイスと来た。怪異の癖に一応人間ではある俺  
よりよっぽど学あるんじやないかこいつ。警戒を続けながらも駅員  
室で出された紅茶を口に含む。温かい。美味しい。

「敵意はございません、私共も存続が懸かつておりますので。貴方も  
勘付いているのでしょうか？」

「まあそれなりには……そもそもきさらぎ駅さんは……」

「呼び辛ければ駅員で結構です」

駅員が語るには同じ古株である怪異『猿夢』が突如その行動を活発  
化させた事がこの事件の起因らしい。

これは意外に思えるかもしれないが、怪異達はその行動原理は共通  
しているものの決して交わる事はない。当然と言えば当然で、己の名  
を知らしめる事が目的なのに他の奴らと手を組めば一体当たりの恐  
怖は半減するのは道理だ。Y o u T u b e r やアイドル同士のコラ  
ボジやあるまいし、お互いのファンを取り込もうなんて訳にもいかな  
い。ファンも何も死んでるし。

そう考えてみると猿夢の行動は合理的だと言える。

同じ口케ーションである『きさらぎ駅』への侵食。先に挙げたよう  
に怪異として弱っていた彼女……まあ彼女か……への侵攻は未だ現  
役である猿夢にとつてそう難しくなかつたらしい。

そもそも猿夢の弱点を挙げるなら、やはり夢の中の電車1台という  
活動範囲の狭さだろう。しかしどの電車からも繋がり、尚且つ相手を  
帰さない性質を持つきさらぎ駅を取り込めば。

「人間は好きなだけ攫い放題、余った奴はホームに置いておく、定期的に帰りの電車のふりでもしてれば困った人間が勝手に乗つてくる。完璧じやないですか」

「私達は無駄を嫌います。しかし私も抵抗は続けています、貴方を電車から放り出したのもそれです。電車は奴らに占領されていますがホームはまだ私の領域ですから」

「ふーむ……でも俺が出張つてきたって事はわざとあいつが逃がした人間がいるって事です、今回は使い物にならなかつたみたいですけど。理由分かります?」

「あれはきさらぎ駅などではなく、猿夢だつたと言わせる為でしょう? 駅での怪異としては私の方が格上なので、一人もそう証言する人間がいないと私の手柄になりますから」

「逆に言いますとこれ以上奴の好きにさせてれば駅員さんは……いや、きさらぎ駅は。その内喰われて死にますね」

便宜上自分達の仕事を『怪異を殺す』と表現してはいるが、少し違う。花乃さんが殴り殺した口裂け女は4体目だし、その内またリスピーポーンするだろう。あくまであれは対症療法、本来の意味で奴らを殺すには一つしか方法が無い。

全てに忘れ去られた時、怪異はその存在を保てずに消滅する。文字通り風化するのだ。

それなら徹底した情報規制で怪異を全て殺せば良いではないか、そういう声高に提言した者もいた。実際問題、少し考えてみればそれは物理的にほぼ不可能だ。だが溺れる者は藁をも掴む。

ある町の小学校で流行つていた別段特筆する事もない怪談『■■■

■■■』。知つてゐる者が少ないからこそ加熱していく噂の中で発生したその怪異に対怪は目を付けた。大してまだ人を害する力もないそれだからこそ、彼らは試せるのではないかと考えた。

生徒達を始めとした件の小学校関係者への徹底した薬剤投与と情報規制、どう考へても犯罪だ。

だが実験は成功した。その怪異の名前も、どんな筋書きだつたかも

覚えている者は誰もいない。

残るのは結果だけ。

人間が初めて怪異を殺した日から一週間、その町を中心とした列島全域で降り続いた豪雨が日本全体にダメージを与えた事態から対怪はこう結論付けた。

怪異とは即ち大衆社会の歪みであり、大なり小なりそれを消し去つてしまえば皺寄せが来るのだと。かといって放つておけばどんどん派生して取り返しが付かなくなる、だから俺達が雇われている。

「このまま猿夢がきさらぎ駅のネームバリューを喰つていけば、何年後になるか知りませんがあなたは死ぬ。そしてそれくらい大きな歪みが消えれば多分俺達もパアだ」

「ええ、それはお互に困ります。だから私と取引しましょう」

駅員が指を鳴らすと同時に、奥の扉が開いた。寝息を立てている数十人が山積みとなっているのが見える。

「猿夢が連れてきた人間です、私が保護しています。奴らを撃退するのに協力するならば無事にお返ししましょう」

「断れば？」

「どの道猿夢がいれば貴方達はここから出られません」

「分かりました、やりますよ」

溜息混じりに天を仰ぐ。まさか怪異と協力して怪異を倒す事になろうとは。報告書に何て書こう、そんな事を取り留めもなく考えていると。

『……次は挽き肉、挽き肉です』

駅員室のスピーカーが喧しく騒ぎ立て始める。磨りガラスの向こ

うには数多の小人が蠢いていた。

「駅員さん、ホームはあなたの領域なんですよね？」

「思つたより状況は逼迫しているようですね」

「澄まし顔やめてくれませんか」

苛立ちながら後ろ結びにしていた髪を解く。少し色褪せた茶髪が湿つた空気の中で揺れた。これ自体に特に意味がある訳ではないが……まあ気分だ気分、かつこいいし。

「駅員さん、本当に俺に害意はないんですね？」

「ええ、まあ」

「嘘ついてるならさつさと逃げた方が良いです。正直者ならそこ一步も動かないで下さい」

すっと目を閉じる。脳裏に思い浮かべるのは扉を開くイメージだ。ここではない何処かに繋がっているその重厚なドアを押す。開いた先にあるのは別に救いの神でも何でもない。

再び目を開けると霧のようなぼんやりとした人影が辺りを満たしていた。

「これは……」

人影は困惑している駅員を押し退けるようにして辺りを動き回っていたが、小人が群がっている扉を見つけるとそれを万力の如き脅力で引き裂いた。そこから先は語る程の事もない。

数分もしない内に夥しい数の圧死した小人の死骸が地面に散らばつた。

巢くうもの。

寄生型の怪異であり、宿主に対して害意を向ける怪異を全て排除する殿堂入りの一つだ。それ以上でもそれ以下でもない、奴にとつて俺は都合の良い住処程度なのかもしれない。けれど別に何の取り柄もない自分が第一線で戦えているのは全て奴に取り憑かれているからだ。

「本当に俺に対して悪い事しようとか考えてなかつたんですね、こいつが手を出さないのなら」

「貴方、結構人が悪いんですね」

詰るような口振りをひらりと躲しながら血塗れのホームへ出る。

「それじゃやりましょーか。俺巣くうものとあなたの、猿夢退治」